日本福祉大学 2015 年度地域課題解決型研究　研究報告

研究代表者　所属・職：全学教育センター・教授

氏　　名：佐藤　慎一

研究課題名：ＩＣＴ活用による教員と地域住民とともに作り上げる国際交流

研究の目的

中部国際空港へのアクセスがよいという地の利もいかし、実りある継続的な国際交流事業を企画・実践していくことを東海市における 1 つの課題と位置付け、東海市立教員研修センターと本学とが連携した国際交流モデルの構築を大きな目標とする。その第一歩として、本取り組みでは、両組織における国際交流関連の取り組みの現状と課題、また、これまでの取り組みから蓄積された知見を相互に共有する。その上で、国際交流事業の質の向上を狙いとした研修の実践と評価を行い、今後を展望することを目的とする。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

東海市側からは、東海市国際交流協会、および、東海市立教員研修センターの取り組みが紹介された。講演形式で行われ、本学国際福祉開発学部で授業の一環で行っている国際交流「World Youth Meeting（WYM）」を運営する学生 80 名程度（国際福祉開発学部 1, 2 年生）と担当教員の 4 名が聴講した。国際交流協会からは「東海市国際交流協会の 20 年　～願いそして活動～」、教員研修センターからは「教育夢プランⅡ」と題した講演が行われ、現状と課題、学生への期待などが共有された。

大学側からは、オーストラリアにおける研修に派遣される教員を支援するため、パワーポイントを用いた英語プレゼンテーションの手法・ノウハウを参加予定の教員に対して 2 回実施した。また、前述の WYM に東海市の教員に参加してもらい、次年度以降の連携の可能性を模索した。

これら取り組みの結果、オーストラリア派遣教員と本学学生との連携手法、WYM への市内中学生の参加形態をデザインした。

優れた成果があがった点

オーストラリアへの教員派遣授業での体験をより有意義なものとするため、参加教員側からの情報発信を補強するため、パワーポイントと英語によるプレゼンテーションに関する研修を行った。現地では、研修内容を踏まえた授業などが行われたということであり、1 つの連携方法を見出すことができたといえる。2 回に渡り行われた研修内容は参加教員には好意的に受け止められており、今後は渡航前に、大学と連携した模擬授業までが行えるとよいとのことであった。必ずしも英語を得意としないながらも、工夫して日本のことを伝えるという良いモデルケースであり、模擬授業を学生と連携して行うことは有効と思われる。実践を通じて、具体的な次のステップを描くことができたことは、本取り組みにおける成果であると考える。

WYM に関しては、日本と海外の学生が協働プレゼンテーションを行う 2 日間だけでなく、海外参加者来日後の交流会についても教員に視察してもらった。その結果、市内の中学校からの参加を具体的に検討していくこととなった。

研究期間終了後の今後の展望

本年度の取り組みにより、一定レベルで相互の取り組み内容と連携の可能性を把握することができた。実践から得られた次のステップとして、市内のオーストラリア派遣教員への英語プレゼンテーション研修を継続し、改善案も実施に移す。また、市内中学校からの WYM への参加に向けた取り組みも具体化していく。

本取り組みは実践的なものであり、WYM の背景にある理論とそれを踏まえた学習環境デザインについての共有はしているものの、教員研修センターと大学とが連携した活動全体を理論的に捉え、モデル化するにまでは及んでいない。単発の取り組みとせず、実質的な連携による持続的な活動へと発展させていくためにも、活動のみに終始せず、活動から得られる成果を理論も踏まえて可視化して積み重ね、活動全体をモデル化していく必要があると考える。上述した次のステップを着実に実行に移しつつ、これらのことに取り組んでいく予定である。